
自分の周り

睡魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分の周り

【Zコード】

Z7418P

【作者名】

睡魔

【あらすじ】

周りにいろいろな人が集まつてくる主人公の普段の日常。シリアルス?何それ?食べれんの?そんなお話

こいつがいんな感じなんですか（前書き）

はじめましての方ははじめまして

お久しぶりの方はお久しぶりです

詳しくは活動報告を

こいつむじんな感じなんですね

午前9時。

高校2年生になつてそろそろひづヶ月が過ぎよつとしているある日の
こと。

絶賛爆睡中だつた俺、田崎悠斗たざきゆうとは体に何かが乗つてこるよつな重さ
を感じ、眼を覚ました。

「……んん……。何……だ……？」

まだ意識が覚醒していないせいが、自分が重さを感じてゐる原因が
分からぬ。

しばらく時間がたち、だんだんと意識がはつきりとしてきて、体も
動くようになつてきた。そこで俺はこの重さの理由を考える。

…布団か？

いや、そんなはずはない。昨日まで普通の布団だつたのだ。俺が寝
てゐる間に誰かが石を詰めたのだつたら別だが、常識的に考えてそ
んなことをする奴はいない。

よし、この案は却下。次だ、次。

…じゃあ、この服？

それもないと思う。そんな服だつたら寝るときに気きがつくはずだ。
大体、俺はアイ・シマンジじゃない。
だから、この案も却下。

これで、ぱつと見える部分の問題は解決した。しかし、理由がまだわからない。

ところわけで、おれは布団をとつてみる。

すると、そこには一人の女の子がいた。

“ぱつ”

俺が布団をとると、そこには1人の女の子がいた。大事なことだから2回言つた。だって！普通自分の布団の中に女の子がいたら驚くでしょう！

身長は俺より少し小さくくらい。髪は黒で腰に届きそうなくらい長い。顔は…めちゃくちゃかわいい。いや。かわいいとこより綺麗に近いかな？…いや、やっぱりかわいいや。

見た目的に、年齢は一つか二つ上だろう。

いやいや、なこをこんなに冷静に分析してるんだ、俺は。

……それより、……この子だれ？

的な展開にはならない。残念ながらこの人は俺の姉の田崎美鈴たざきみすずだ。というか、なんでこの部屋にいるんだ？俺が寝ているということは、ここは俺の部屋だ。ということはここにあるのは俺のベッドだ。なぜこの人は俺のベッドで寝ているのだろう。

確かに、俺の寝像が悪すぎて他に部屋に入ってしまった、という可能性も無さにしも非ずだが、俺はそこまで寝像は悪くない。せいぜい

「ベッドから落ちるへりこだ。

とこり」とせぬ俺のベッドに入ってきた……？

頭の中が整理出来てないが、とつあえず名前を呼んでみる。

「み 姉……？」

「……んつ……うつふ……」

まだ起きて無くようで、寝返りを打ってしまった。そのせいで、み姉があれに抱きつく形になってしまった。あ、ちなみにみ姉つて美鈴さんのことね。

もちろん、こんな状況がうれしくないわけではない。ないけどね、あの、その、当たってるんすよ。思春期の俺には精神衛生上よくしきないものが。

そんなことより女の子の体つてこんなにやーうかいのね。これ癖になりそうだわ……。

はつー意識が飛びかけていた……。恐ろしき、み姉。早くみ姉をどかさなければ。俺の理性が保たれていくつか。

「ん、無理だね。腕と足でがっちり俺をホールドしてし。

俺がどうじていいか困っていると、ある人物が俺の部屋に入ってくる。

“ がちや ”

「 ゆう兄いー。そろそろ起きた方が……」

と、入ってきた人物は俺の方を見て静止した。そりやそうだ。俺だつて驚いてるもん。その人物は数秒経つと正氣を取り戻した。

「 ……って、何やつてんのー。ゆう兄ーー！」

今怒鳴つているのが、俺の妹の田崎香奈。たさきかな 身長は小さめで。髪は綺麗な茶色で、肩にかかるくらいの長さだ。顔はとってもかわいい。み 姉と違つて幼さの残るかわいせだ。年齢は俺の一つ下。というか怒る対象は俺なのか。俺は無実だぞ。

香奈が大きな声を出したため、み 姉が起きてしまった。

「ん……何……？」あ、ゆーちゃんおはよー！」

「おはよー。み 姉」

「ん……。じゃあ……」

み 姉は、目を閉じて腕を広げて何かを待つているかの様だった。心なしか顔が紅潮している。

「 ……何？」

「ん？ おはようのちゅーだよ？」

「いや、当然のように言われても」

「 ……しないの？」

「しないよ」

「ちえ……」

残念そうな顔をしてみ 姉は再び眠りにつこうとする。…………そりこ俺に密着する形で。これに香奈がさらに声のボリュームを上げる。

「ひょっとーお姉ちゃんー何やつてんのー！」

「うむ…。どうしたの？ 何が香奈の心の琴線に触れたんだ？」
「まあ、わからんけどあれだね、最近の若者は怖いね。

香奈の大声にさすがのみ 姉も耐えかねたのか、やつと田を覚ます。
そして香奈を見て囁く。

「…………ん…………えいひこりこりこりの…………香奈？」
「えいひこりこりの…………な…………い…………い…………！」

ついに香奈が爆発した。その気持ち、俺にも痛いほどわかる。さす
がだ香奈。今、俺にはお前が天使に見える。

「大体！ なんでお姉ちゃんがゆつ兄の部屋にいるのー？」
「だつて、昨日寒かつたし……。ゆーちゃん暖かいし……」
「それは理由になつてない！ 大体今は夏！ 寒くない！」

そう、今は夏なのだ。それに昨日は熱帯夜だったし。

「や、それに…… もうひとつ理由があるんだよ…？」
「なにー？」

香奈がすゞしい剣幕で聞く。…… 香奈さん、怖いつす……。

「一緒に寝たらぬーちゃんが襲つてくれるかな…… って思つて」
「…………」「…………」

今あの人は姉として言つてはならないことを言つた。隣では香奈が

「ふう……」と溜息をついている。

「まあ、わからない」とはないけど…………

無いの！？いや、そこは分かつちゃだめでしょ！こんな会話も何回目だらう？30回は超えてると思う。ふと時計を見る。…9時3分……ああ、遅刻か……。

「とにかく！今日は私がゆう兄と寝るからねーそれに、ゆう兄もお姉ちゃんを部屋に入れないと一分かつた！？」

「…………うん
…………はい…………」

そう言つて香奈は部屋を出て行つた。

「…………あ」「」

2人が香奈の思惑にはまつたと気付いたのは全てが終わつた後だつた。

夏休みの大半は無駄に過ぐる（前書き）

はい、2話目です

感想、コメント、ダメ出しなどお待ちしております！

夏休みの大半は無駄に過ぐす

遅刻だ、なんてことはなかつた。なぜなら今は全學生の味方、夏休みだからだぜ

香奈の策にはまつたと氣付いた後、み 姉が香奈に文句を言いに行つた。

香奈にしては珍しく、おとなしくみ 姉の説教（愚痴）を聞いていた。しかし、み 姉が一通りはきだした後に俺に向かつて、

「でも今日は一緒に寝るもん。…ね？ ゆう兄？」

と、言わなくともいいようなことを言つて、み 姉の怒りを買つた。どうでもいいが、俺宿題終わつてないんだよね。どうじゅう。

そんなことを知つてか知らずか、2人の喧嘩は俺をまきこんで行われた。…おれ宿題やりたいのに…。

言い争いは1時間続き、その後買い物から帰つてきた母親に止められた。その後しつかりと怒られたらしい。うんうん、喧嘩両成敗。

これで俺の宿題に時間がとれるかと思いきや、母さんが、

「あんたにも原因があるんだから、2人に何かしてあげなさい」

と、事実上の死刑宣告をしていった。そりやないっすよお母様。「いや、宿題が……」と言つても、「やつてないのが悪い」と一蹴された。おっしゃつてることが正しいから何も言ひ返せない。

という訳で今、とあるショッピングモールに来ている。

「ほりー・ゆう兄ー早くー！」

「ゆーちゃん！遅い！」

俺の3メートルほど前を行く2人のテンションは上がっている。それに反比例して俺のテンションは下がっている。何故かつて？いや、そりや美少女2人とショッピングできれば何も文句なんて出てこないが、荷物を持たされてテンションが上がるやつはないだろ？

そう、今俺は荷物持ち。現在の時刻は大体、午後2時くらい。（母さんに2人が怒られた）後、出かけることにした。いや、これは説明しなくていいか。

で、どこに出かけるかという話になつた時香奈が、

「じゃあさ、服買いに行きたい！」

と言つたので今ここにいる次第だ。

11時くらいに着いた俺たちは、それから3時間ずっと服をみていた。いや、みていたのは香奈とみー姉なんだが。

3時間服をみて買わなければいいのだが、もちろんそんなことはない。さらに相手は女の子2人……。

「ゆーちゃん。どうしたの？」

「いや、…疲れた」

「どうして？」

「どうして……」

自分たちで持たせておいて「どうして?」って聞きやがった。これが同級生とかだったら「ふつ飛ばして」る。だが、俺に聞き返した顔があまりにもかわいくて何も言い返せなかつた。くつ……ひきょうだぜ……。

「あいつ兄——早く——!」

「まひ、香奈が呼んでるよ」

と、その時、み 姉のいる方向から音が聞こえてきた。

“ぐう~”

「……」

「……」

「……おなかすいた」

「うそ。知ってる」

とこいつ」と俺たちは少し遅めの昼食をとることとした。俗に言つて「フードパーート」という場所に来た。なぜか母さんが遠くで俺たちを呼んでゐる。

「まひ、じゅかうちー!」

「……なんでここにいるの?」

「席取つといであげたから」

「はあ、ありがとつ。服買つてる間にどうしたの?」

「へえ、とこにこったわよ?」

実際に不思議な母親だ。

さて、腹も減つたし何か買いに行こうかな。俺が立ち上ると、香奈がするつと腕をからめてきた。

「へへ……。ゆう兄、行こっ！」

母さんが茶化すように言つ。

「あら、お似合いのカップルね」「でしょ～？…えへへ……」

香奈が顔を赤らめて笑う。

「あつ…ずるい！」

それを見たみ 姉が俺の開いてる方の腕（右）に腕をからめてきた。

「もてもてね、悠斗は」「勘弁してよ……」

俺は疲れたように言つ。姉と妹にくつつかれて喜ぶような性格はしてない。いや、そりやあちょっとはうれしいけどね。でもそれよりも、その、あの、や、やわらかいもの、が当たつてるんですよ……。多分この2人のことだからわざとだらうけど……。その、ね？うわ、もうやだよ……。2人のことが直視できないかもしれない。こんなに近いと心臓の音とか聞こえちゃうのかな……？いつも、くつづくなとか言ってるくせにくつつかれてドキドキするのがばれたら2人を調子に乗らせるだけだしなあ……。俺は意を決して2人の方を見る。

……「わあ……。なんかすっげえにやにやしてるし……。しかも香奈は「うへへ……」とか言つてるし。単純に怖い。…………よし、落ち着け。落ち着けば何とかなるぞ、俺。でもこの感じじやあ無駄に、『無・駄・に』『ドキドキしてゐるばれたかな?』ああー、もう終わりだー。っこさひきまで軽くあしりつてたのに……。明日から、いや今この時から立場が逆転しちゃつて。もし逆転したら、この2人の恐ろしきまでのアプローチをぐぐり抜けなければならぬのか……。いや、それは相当きついぞ。いまの時点では俺の理性は相当削られていくところに……。誰か俺の周りで頼れる人……いるじやん……よし、明日相談しよう。事態は一刻を争うからな。

……にしても母さんは止めようと思わないのだらうか? きっと思わないだらうな。多分「面白そうだから」とか言つてほつとおくに違いない。

もし俺の理性が負けたらどうするのだろうか? いや、そんなことにはないないとと思うが。あ、でもそれはそれで……。いやいや無いつて! 相手は姉と妹だし! でも、もしかしたら……。いやいや!

おれは歸るまどこの葛藤を繰り返した。

夏休みの大半は無駄に過ぐす（後書き）

さて、次回からこのあとがきのスペースで何かをやろうと思います。

まあ、その何かを考えてないんですねが……。

お楽しみに

3人の関係（前書き）

正月休みから戻りました。

それでは3話です。

3人の関係

その後昼食を食べ、家に帰ってきた。

さて、話し話変わるがここで俺とあの2人の関係を話しておこうと思つ。

俺にいきなり抱きついたり、寝てる布団の中に入つたり、む、む、胸を押しつけてきたりと結構きわどいことをしてゐ（それでる）俺たちだが、実は血がつながっていない。

……なんてことはなく、普通に血がつながっている。しかし、よくいるような家族とはその体系がかけ離れている、と言つても過言ではない。

実は、つい最近まで俺たちは離れて暮らしていた。俗に言つ別居とかいうやつだ。俺が中学に上がった今頃、つまり4年前の夏にあれの父さんが冷蔵庫にあつたプリンを『母専用』と書いてあるのに気がつかずに食べてしまつた。あとでそれを知つた母さんがとてつもないほどに激怒した。それはもうすごかつた。家が地図から消え去るかと思うくらい激怒していた。……今考えると恐ろしくくだらない理由だと思つ。

それで父さんが身の危険を感じ避難した。その時に香奈とみ姉を連れていったのだ。普通、抵抗するものだが、俺も香奈もみ姉もまさかこんなに長引くとは思つていなかつた。それで今年の夏休みの始まる1週間前までの4年間、全く連絡を取つていなかつたといふわけだ。再開した理由は仲直りしたから……らしい。

らしい、というのは、俺は実際に父さんに会っていないからだ。俺はその日たまたま友達の家に泊まりに行っていたし、仲直りした次の日に出張でアメリカはニューヨークに行ってしまったからだ。なので俺が家に帰ると4年前から成長した（当たり前か）香奈とみ姉がいるし、母さんはなぜか超ご機嫌だし、という実に気味が悪い状態が出来上がっていた。

余談だが、久しぶりに2人を見たときに、一瞬だけキッとした。「一瞬だけだぞ！しかもその日の夜に2人から「絶対振り向かせるからね！」という謎の宣言を受けてしまった。聞いたときは何のことだか分らなかつたが、次の朝、目が覚めたときに2人が俺のベッドに入っていたのを見て「あ、こういうことね……」と気が付いてしまった自分が憎いと思つ。まあそのうち2人とも飽きると思ってるので、気にはしていないが。

さて、話を現実に戻そう。

俺は家に帰るとすぐに2階に上がり、自分の部屋のベッドに横たわつた。

「はあ、疲れた…」

今日は本当に疲れた。朝の騒動（いつもの事だが）もあり、さらに買い物に付き合わされる、という地獄めぐりをしたのだ。疲れない人間がいたら見てみたい。

そういう経緯を経て、ベッドに倒れこんでいる。すると、部屋のドアがいきなり開いた。

「やう兄？起きてる？」

香奈だった。手に先ほど買った服が入った袋を持っている。どうでもいいがノックくらいはしてほしい。

「おう兄、『めんね。今日は無理矢理付き合わせやつて……』

香奈が謝つてくれる。普通なら文句の一つも言つのだらうが、こんなかわいい妹（他意はないぞ）怒れる兄がいるものか。俺は「別にいいつて。俺も楽しかったし」とだけ返しておいた。

「といつ訳で、今日のお詫びも込めておう兄の為にファッションショーをしたいと思いまーす！」

「……え？」

「ファッションショーだよ？ ファッションショー。『れしくないの？」

「いや、まあ」

「でしょ~。じやあ着替えるからちゅうと待つってね」

そうつ言い合って、いきなり服を脱ぎ始めた。

「え、ちゅう、香奈ー！」

「ん？ 何？」

「なんで脱ぐうとしてるんだよー？」

「着替えるためだよ？」

「いや、なんでここで」

「興奮したゆう兄が襲つてくれるかなー？ とか思つてね」

ふう。妹が暴走してきてるNE 冷静っぽく話してたナビ、内心めちゃめちゃドッキドキだNE

「ど、とにかく着替えるな！」以外でな…？」

「そんなこと言つちやつて。本当はすつ『』いドキドキしてるので
しょ～？」

「そ、そんな」とねえよー！」

妹はエスパーか何かか。

「お前……。俺が本当に襲つたらどうするんだ？」

「そんな」とは無い…………と思いたい。

「……ゆう兄が初めてなら、大丈夫だよ……？」

今俺の目の前にいる人は妹として言つてはならないことを言つた。
朝のみ 姉に続きなんなんだ。朝の姉、昼の妹。なんかことわざに
ありそうだな。

といつもこれは兄として、いや、人として矯正する必要があるな…。

「…いいか、香奈。俺と香奈は兄妹だ。兄妹、兄妹、兄妹」

ゲシュタルト崩壊するまで言いつ。

「で、普通の兄妹は『』んないとしないよな？」

「でも……」

「でも、じゃない」

言い訳しようとする香奈の言葉を遮り、続ける。

「確かに、俺は香奈の事が好きだし、愛してる。でもそれは家族と

して、兄妹としてだ。それじゃ駄目か?」

「ダメじゃない、けど……。でもつーてんでも私はもう……お兄のことをただの家族としては見れないから……」

香奈の言葉を聞き、俺は溜息をつく。香奈はそこまで考えていたのか……。俺も香奈に対する認識を改めないとな……。
いや、それは無いか。

俺はどうかと思いつつ腰かけると、部屋にこきなりみ姉が入ってきた。この姉妹はノックをする、とにかくことを知らないのだろうか。

「んー? 何してんのー?」

み 姉は服を脱ぎかけた香奈と、ばべっどに座つてゐる俺を交互に見て、驚いたような顔をして、香奈を連れて出て行つた。よひと姉としてあつて言つてほしいと思つ。外から「そういうことするなら次は私も混ぜることー」とか聞こえてくる。前言撤回だ。悪の根源はあいつだつた。

しばらくすると2人が入つてきて、「ゆう兄、いつか続き……しようね……?」「なにー? 続きってなにー? なにしたのー?」と騒いで出て行つた。続きってなんだ。何かを始めた覚えはないぞ。しかも、香奈はわつきの事を全く気にしてないらしい。こりや止めるのは難しいな。

とにかく、部屋が静かになり、やつと俺に平穀が訪れた。よし、昼寝だ。じつにうつときには寝るのが一番だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7418p/>

自分の周り

2011年10月7日22時22分発行